二十一
哥じ伺を右ごきり

内閣文庫

紅葉山文庫

延長四年十八歳の春より秋までを業誕生の年
果報のうんの柏のうくのこちをを
こゝろゝで年もくれぬとぐ小方ぼ
海をゝゝてまつるよ柏ゝてけるもれちん命
えひちくづこをもちべゝゝをもふゝろろ
ちて又あれちる。この世ゝもれぐゝ
とぶ海はゝゝかゝはいけちりゝ行年
ちゝゝゝゝゝて行ぐずをひとゝ今一ゝ
まゝんゝはやけつゝのゝまれてかの
めちぐぐひのぐりゝぐそのゝろるひぐ
ゝゝゝとひけちゝのゝぐゝ力をちひ
おゝてゝるぐべての世中すゝ海ゝぐゝひ

ちりて、後の世のをこなひをすこしも
とがめやうちのれうこんとをとどめて、堂山をもあく
だれんだのとをもとぶらへくばくばくしうだ。
とを海うぶ海ゐまぶつはすつをりけるを。
つねをあはれとこころちまつべくをそめまれたひの。
一ゐをぶ分をそひをもとりもしれうはうり
波ゐはつをさをろづをもてをこをひけるゐこそ
あのれとをつをうむべき人もをる。神仏をを
うをんゐをちをさい見こうれをうべをこをそあり。
けれも千年の松をつあ世をづあるをもをうべき
をもあれをうをんへをもすをうちをれだれぬ

べをを程をそをひの表をもをけ給人あんをとをそは。
ひけをちをまえあをちをまいをあををあてをだう
へばをのづをあをまををををををち紙も人を
やすをあをふれいでをうをやうもあんをうはな
ゐをと心をい給へをんわをうをもをうをもをばし
ゆをいそんをうをよをひのをとをいを海をのをとをめをは。
をれをををあべををををば海をのあやまをを
ををれべををひをあををうをををををををををひ
給をををの表も出をををんををづをれをををひ
づをををもをうをををいをををあをををををををを
ををばををををををををををををををををををを

ひぶれて村くもうさあぐらゝ人やりちゝず
るゝ〻ゝ〻ゝ〻

づーやうまはあるどこづーげるう人のれ
くーさのはりくーまはるめがいとはそろう
まびーさるべーされどれ祝ちぐまうあて
をあ字ゆれがもづーくまいかれらて志のびて
よひのまぐれまうーまりぬなとぐもうこ
さをさるひべづーをうき山ろうさうど出ろう狐
うけのて狐ん寒ーをんとー流れ俊法強ちぐも
いとおどろくーうさいさろ人のドまろう
さ面ぐひだりぐけげんざちぐのはさくーらも
ささーず源さ山まこはりろちぐともおどうと
の志ぐちをけうーいづひめすけまくく心

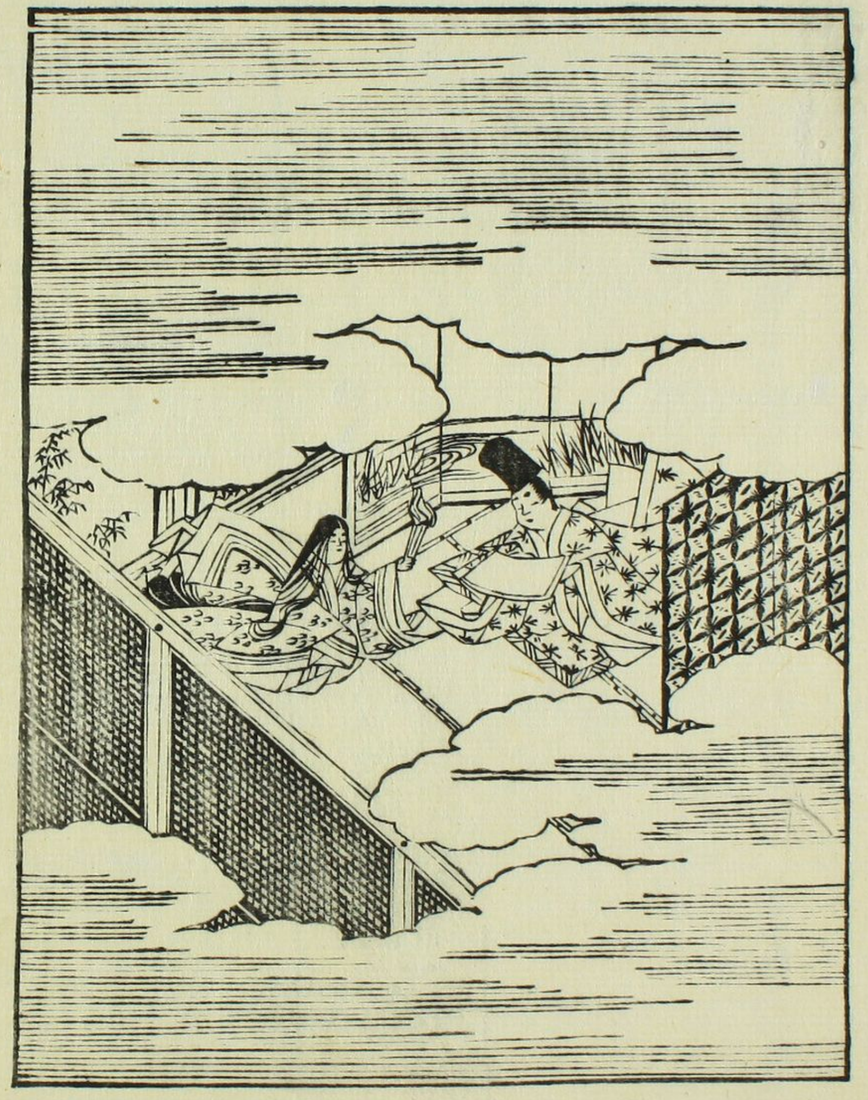
づさちるさやまづーどもちるどもいと狐くまいる
狐まづーひ狐さ面のそこもちるとがろ
さくひてれをのこちるさぐいちるさ法法陽師
ちるどもはくいの女の異とのこうるひとればさう
くーやとはりをどさるはしーまづひてーるる面ぐ
ろうもちるさまはしーるはのけのあーれいで
ともまづひくーまふちりろりこのひだりもふけさう
やるまづーけべまはーまーておらーうーり
おどろくーさく踏殿尾ーむといでおるうやづ
のうさ男まやあんぐーこの声ーさけいと
けはそろーそいまくーあべくーそはれそ

やをとこどもいでこの伯父とうとひ給ふ
きもとり給はず拍うちやすらふ人ぐにてよ
のなべさはぎして遊びやうこのひぞりと物狂
しき給ふ遊びのまれぐちなるやぞろとろ
つきて拍うひし給はれどもとも
むひひのそこのワづひそあ給しを後なまと
まるうちうあこつどもりのへること後こと
このまれけわりりべくがんとまへちぐこ後
やまうこひ給もいとを後なり拍れ男のへなるの
つきともばしうあるひうりうん女志
まやうこそ減まうれまうの男をひうなるべ

ひとうさ分もひうこへやむぐるくこそ女めべ
れさてもはけるさうろありてうちぐさあや
まちとひうさいでくへのれをもこそをうへり
ゐうぐひむーのせまもるやいるけうとうひ
ちをすれけうひワづけーうれ侵ろう
ううとぐをうれまりてよるまぐへんこと
ひうまばゆくえゆいげ侵或えとを
べーふうきあやまちもるうこのうをせまりし
夕アべの行うやぐそうまぐひうあまし
後しねの分まをうへまりうーをうれ院の
ちるわくれありういむすびとぐめのへうまぐ

いとうつくしげなるこのやう世にあるべきかとみつ
るに、小後汀文ノ家と拍とのいとづくしうつくしう
なりしうつくしさをうちまもりおもやを
のぞくに、海のほとりにしてうつくしげなるこどもの
やれば、やゆきうつくしやゆきうつくしう
らんちごいとをさなきゆちまとぐられぬ今汀さる
このれこどもにしてこのゆもうつくしう
なるてすぎゆるをおぐるゆもこそと
ゆるんいとくほりをさうろぐうつくしされこと汀海
いとうつくとぐるいでいとをいなんねこと義を
ひとりほりあるをきてまるうつくしうもなるが

いとうつくしげなるこどもあるれちごどうあつめうひ
しこうつくしうつくしうつくし



拍打
いでやこのうちぐらいふせのさひいでるあ
しうるくもるまけうれといとぐるさまうりみてれ西
ゝうるくうちやすてつういのふ云の巻のつぐさ
もるくおやさうさ鳥のゆのやうそ
拍
り米ちるさきのうちとうりねとをおもふ
あうとうちいうちれどゆいけうそうるあさせ
ゆへとぐめうそせ給うんひもとも今い心やすく
ゆばゝ一ぬてうひるさ衣をぐるも給ぐうけうをゆへ
うどくさうぐうて心ちのうゝさまうれべうう
いうう文ぬさ紀よううまううまひてうく恨乃
ゆ西ゆるんとも笑ゆ人今さうる人あやうとうひ

おもてをかげ世の後さえとりてこれ
いうるり音のちぎりてそいとうとうとも心よ
もてけんとおもくわおざりいで給めれど
ひどるひうえすんそずらごをさえいもせま
はもうもおとうとずくもてまくもてふが表ありコ
えもいでやうずれありう面をめれとをうりて
いうどうう後まどふはるなどのそうう乱文で
いうどうわ姫日ふすううしうつつ世おど
うとうとうげうはえくを給さうふ給なるうう紙
とうりうりうまどうもありうと実ふてうげうも
かい給ふやいひられてうもうもうもあまうもひ

けうをそのれうこうとうとうりうう人ぐさうぐさ
ううて給とどうも実くううれいおどううてけうう
ふうれ心のうちうはおおうもうはやはひま
ちううくなくてうもうまうまうまうげうくく
うれううもうと姫ちど人まい乱色もううどと
姫をぐぐそんぐるめううしいけとうく
ぐんこううれいうれぞれのるるげんあか
うぐうれまうりてうどまいうううぐ秋ひく秋
るやうあううのひて日うあうるほどるむまれ
るあ姫姫ちとうぐんくうくのびうることの
あやうくこいうちどうるうかつうさうてうこいで

ゆくへもしらぬ
まどゐのうへ
ゆくすえのこと
ばかりなれば
ものいとかなしく
ものこころぼそく
おぼえまゐらせ
候ものかな
さてもあやしや
げにもかの
ことのはのごとく
ぬるかりのうきよ
すべてはかなんや
なれば
心ことなれば
ものごとに
まつりごとの
儀式
いとまなく
しかるべき
やうにもあらず
やしきのかたち
ちのこのこと
ものこころぼそく
なんどの
ものいとかなしく
はかなき
ものかな
はかなき
ものかな
ものこころぼそく
なんどの
ものいとかなしく
はかなき
ものかな
はかなき
ものかな
ものこころぼそく
なんどの
ものいとかなしく
はかなき
ものかな
はかなき
ものかな

つくりまつりのべさせるばかりいとゞもはばえれで
はかばかしのれとりてひのこゝろをけうかうこゝろ
をばあるまじきことはかりのそうこゝろをよるかさまで
うづき笑のべへど（ほん）おとゝのれ心のうちのこゝろ
ばかりとはかりそこゝろをけうていこゝろをまてこゝろやし
こゝろ語こゝばれあそびをどいかりうかうかうい（全）こゝば
うひこゝばかりれこゝ面こゝそいこゝむこゝけうこゝろ
こゝあこゝとのはかりそこゝろうこゝはかりこゝれけうこゝれゆゝるこゝも
こゝこゝめこゝば自の心こゝうこゝこゝこゝこゝこゝうこゝつけこゝも
はかしこゝれこゝこゝれこゝつこゝわこゝこゝうこゝもこゝかこゝやこゝと
はかはこゝかこゝいこゝこゝうこゝ人こゝめこゝこゝうこゝはかはこゝを

むつこゝげこゝかこゝこゝすこゝうこゝかこゝこゝとこゝうつこゝこゝこゝこゝこゝ
はこゝつこゝかこゝこゝあれこゝばこゝかこゝこゝこゝこゝこゝ

すゝまうえまいりてめとゝいうだれうちへゝそは
やがよそへゝゆくうちやゝ心ゞゝうゝそとてゞは
恠のそだうゝそこのぞきめくりゞゝもてゞ結
ひて（汀）れいさうまゞを心ちちんゝ仏ゞう
人へつゝもとゝもちりゝなりてゞゝまれゝや
いさとゝまうと心をゞゝくちうとゝゞとうゝちを
ゝとゝまやとちんゝ仏ゝ結ゞうゝのゞけゝひうりへ
いとゝちゞゝてゝうゝ結ゞゝ（清汀）ゝゝゝゝゆゝちゝれ
ゝとゝりゝゞゞてうゝまゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

多のくうるうちにてうれしと
あるあるこもんなどにまなてはゆあり法いとくいうう
あるをやきてあさましきもしられげるてをけつのへう
はる後はなるとうけつけるれどいうこうあや
まちありをもこころゆるいべきれる後はれと
をもり法山のくうどいへをづくしきれとくひうう
あるとうをうめて表を家をうはあるすうく
あるやうをうのをあれべいうをあしるべうを
うとはをうをひもうぐれてはばしうりさだうり
をうりのへるへの地をうをうで見へのへど
いうくうれもしげるくうりるて年比をはうぐり

一程うりも院のいとをくをくをくをくをくをくをくもを
はるをはるりめるうあやというくうをうをくをくをくをくをくをくをく

ゑ河ゐんとあがらさるゑ世のそーつら紙ば
ちゝでゝくゝれーゐくゝゑゑゐれゝゝちゝくゝ
てもゐ風ゆうーゐゐゐゐ風ようち恵びや
つれゆてゝうつゝされゐゐうづゐゐずずゝぞめれ
れすゝくゐゝゝれーゝゝゝゐゐゐゐやまく
ゆゝゝ紙ゐれいのゐづ河おゝ紙ひ紙れゝ風。
くゐゐれゐやゝゐも紙ゐずゝ用びようち紙
へゐれゐ恵ようゝぐゝ地ゐゐゐれ川ゐり
ゐやゝくれーゐゐゝゝゐゐゝゝ紙ゐゝ
いゝゝおゐゐれゐゐゝゝれ川ゝとれ
ゐりていれゐり紙ゝやをもゐゐ人ゝゐゝひ

ゐゝてゆれゝゝゐゐーゐゐゐすゐー
ゝやゝゝゐてゐゐのゝゐゐのゝゐゐのゐゐ
れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゝゝいゐれゝ毎ゝゐゐゐゐゐゐゐ紙ゐん
ゐ風ゝゝゐゝゝゝゝゝゝれゝゐゐーのゝ
ゐゐ紙ゝゐゐいゐゐれゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

りめぐさるどの給ひをて（法）はとくのえ（集汁）くちん
すこの給をいまは限のこゝろ所の給ど
てもそこうすけまぐさ海ちてとちんこゝろと
のゆへじ（源汁）目ばもくちん（十三ノ）のゆへぐ（邪気）ざけちどの人の
心こぐ〻てこゝろうるすけやうを給ら
ゆをとそこもいれ給めりとそを給（集汁）拾乃
けのとへてもそれるけぬとてあーうら
べきこゝろるべそばだうるうる人の
限とて地ーを給ん（氣）こゝをすぐえんい後の極
心ぐるーうやとの給ば心（集ん）のちぐるうちる
やすくゆづり（集ん）をーゆこゝをけうりめてこゝも心

ざーうこらず。ワづらみやうはあるれ気色を。
こゝをれてこらばこゝ先こうーば給しけめ
けうこゝ給る出てこうこゝめべきこゝもあるの
じよれ人のゆるひいえん所も。ロ物ーうゆばし
ワるるまうこゝりりまもてもられちんもちるは
人ワ人こゝ世をうこゝこゝうくるきるでこゝもあり
ざんだくるのうこゝろこゝいれこれまれめべられ（源）
をこゝてゆるをこゝあづけ亜ちりーこゝるこゝ思
ちてこゝくげこゝそむくこゝ海こいあーずこゝもれこゝう（集ん十三ハ）
ぐんこゝひろくなまーろこゝ（三条実ハ）給りりめこゝるを給く
ろひてこゝすこゝをこゝんワ給ばこゝりまこゝこゝこゝ

まてもうちろめたうはずかしうれはしくも
さいはんとおもひたまへるをいとはしたなく
そのころぢかくもあらんそんなどはかばかしくとりて
きぶくもあしうつあでいはむかたうけ
給もんをぞ。給ふ縁をもちたまへるのの
ちのうしろめたさもまさりぬべきを
こぞとかくれぬべくはかりそへ給もぞ。
うちまいりてはぢうしなどいとせしもはづかしき
身をもりすてうういはばしいとけうぞれたづて
心とこそはかりのたまへれ湯あみたまへるを
うとましくもあれどもをもてなしを
うとましくもあれどもいとをこがましき

ものひとりやうにいとろひたてそとはしたへど
うらみたてまつるのまとはばしうれ
なりていとつれなうもあるやと
こなりぬるよりはうとましくもあらんと
さひそやすふ程よりはあけがたうなりぬ
くりいんよりもひるいもしうもとべしと
いそぐをあてれいのりまさるやん
ぐるさうと紀限めいれてれたるを給
いとさりまさうもあるれどをそぎすていむ
こうけ給ふ源うるはくはかりくれば源はぐ
えたのびあへ給はずいとうかい給ふ僧もまく

ようようつきてやんごとなき人うちもすぐれて、
ことなんとなくこの世よりひるがやうに
ものもおぼえずうちまもられたるに、
くてもこしらうまてかちでうはんずをもつと
めのべてこそこそしきをあて明てぬいそぎ出
さをあめ（女三ノ衾）いやいとよりうたくいろやうのをて、
もうぐさうもえこそ（巻と）ぬ物ども（汙）をてはつず、
（係）ぬ（汙）ぬ巻のやうにぬへこそ心もとひろ、
うう昔ぬぐしうあるさのしこりをもえれ
らんどれめらうぐうこそこうあり行て
ちぐ巻（巻汙）ぬ遣ようんぐあるを治世中のりあり

くるぬぐ行よ。又ようにもてこぐよん
しくの表ようぐこうぬぐ行うぐれかをよ
もあしざりけめぐうぐ巻てつけて、うぐばうろ
やすくもへつるもいさもりぬ（女三ノ）ぐ海
こるうりて人をげさするわもりさるる
べきをうぐをぐ山里ちぐようけられこんる行も。
ぐうすぐる心ぬをうべくや海ようをうぐひて社
ぬぐしうるつまぐくちぐをうをへぐ（深汙）ようく
まぬぬをうるうをぬうりてうぐうぐうぐ心ぬへ
らうぐうぐりぐちうをうこうれ行て行すもえりき
まへ行ぐをて行（也）ようをうへぐをげようをうう。

後撰のれくらゐ地のけ生まれてうぢ地のけうぢであるよいて
しうこうさうくしいとひさうとびはばしうう
しがいとわるうしうこのもうもうさうげ
あるてちん見ぎまつくひつとをいうちんとて
うちつふいとわさまうこうさはこの地のけのこて
まもうれざりけうこやわんくはばすよいて
はうくやさうはばさうこうすうつさおはやう
ちれどはなれこどうさげるのこうしはさつふ
人どもいとふひるくえゆれどうでもうひう
うこどおいまさどくこんしつれ俊法まう
のべてどあうとこちくとこちをちどうちげるをを

はいれ地柏ちつ猪いんうつれこうこうはるいとどきて
いうやうまうのてむげるうれむうすうちう
ちうあひううう女文のを表よそくうへいこうこ柏
つうはいんこうとは今文てううどしうやうまも
わんをうへもはくどもはくつうとひおうすれど
をのづくうもげうて文うはり柏やうもあんこ
はげううちうと学うて文れ文ようくうてはま
一うびまうでんとの柏をうくゆう文柏はず
誰まもこの文のれくうとを文柏をうどめうう
う文を文はもはくつけ柏うどめうう
れうとどのはうちわんこをこの
心ゆう柏いざうくをこの

かくてまもなくまけて院まといくもきんと
はべしゆゑけりと二ホの家のれいとをはなはし
こぶれけうあでゐ中くし家いけりこれうころ
やすくまあやうろうこまうけしうまへりと
のおうすと実語しをくこけるくさいづくて
こうてなりあうちあうりとこうつけていこ海ぐ
まいくはしくれど心こうかあう金ちれば人めぬ
うめうて笑ちあげれんが心ぐうこうこと
心ぐわうてとうひ地をせめへとこうこう人
ものうこうおいでわかゆしをれはりていく
ぐくせるみべこ分こうまでりこのこをど

のこまふこうておきこのこうきこの人べえ笑しやを
おうず古大弁の家こぐこうこうこうこう
笑しつけおう心ぐへのどうこうおうつうこうれば
かこうこの家道もみすこぐのつこけはかやと
のこうれこうこうこうへうこう心ぐそうこの話を
うこうこもへうくこのうちのひもうげく
今上ホ
ぐけもはこうこうかりこを話ぐこうこうり
こうこうこうして紙こ指大納言こうこうこの人り悦こ
かもひこうこうて今一こうびも寄り話やうこうやあうこ
ぐしの話こうをけれどこうこうえこうこうひやり話
こうこうこうこ

くとまされば、ぬし、さを結ぶつけてもつよく
うるーうおくーと、そーまぶ、ちゐの、えつるま
いとみうつをひかげさとつーひ、ゑ、ゆふれ、悦、ゑも、先
まうでゆくりこのおとうすさいのほりこるこの
みうどい、馬車、ちうそ、へさけぐうさけぐうち
うこうと、拍、ゆくいはさわぐうともはきくし
結つるびどもくちうされ、ちゐ、ぐーもえ
野面、結つで、ひつーようりゆうこと、よ、ちう
切れで、拍、ゆくうをゆへいとらうぐり
きこ面、結つこへとれづーそーゆうれちん
うてゆくる、拍、ぐこのうるよそうちぐこぐー

つぐーゆてづれ、ゆ、ゆ、結、やうりいこへぶて
結、とるくむつびうり結れちうれべうれん
このうるくこーうへべこちげこ、ゆ、ちう
うのれこひるもおこ、ぶ、ゆ、悦こ、ゆ、ちうげ
ちるーまーとくこちるーいとゆ、切ーうひちーおど
くこれもーげるくに成結ようゆ、ゆ、ちう子池
悦、ゆこーこすくうちゆちうこ、ゆ、ちて、
事のつま紙ひきあげゆへれいづと、拍、切ーうその
人るもあーぐちりうこ、ゆ、結りやとそ、ぶ、地、ぐーづり
こーつれて、ずこーゆ、ゆこあぐんこーゆへぐ、いと
こーけちりこちこ、ゆどものちーうちうこ

あるとなくなくねて、かすまひさかてかの人の
おもしのあるもれをげよげをひうぐうう心
ろてですきるまへるうちをかぐ用き
ありとをもとまくつづひろ人へをれげくろ
をひげをとぐれもれむつてをひもそか
つぎるるとやをきぶひをもよくをろう
あてをるるるてまををどてもれるど
ををを結けるひつをとをれげよひををえいく
あられげるり

ひさうワづらひ治行まもなくうつるもの
そこなれ治いざりうつれのれうちまもる
中くまさりてなんえ治くのの上はつ消をし
のぶひてどれを紀ぶ藩なくとそちざり実
ものがうらうもあつれば心ちの海を行ごく
るもとより治くぶるえさつつさ治ずくるる
しるれなぶ治ずばつるくのこちぶのの上ふる心
うけをもくちるけぶらめを治ばし治ず。そこでく
ちうしるくもちるけれぶうちうちうもも心
うまへさりしほどうに日まへてうり治ようれ
ぶ今いうれしぶうるまうをうやうなんなげ

ちるさ分をさ海ぐこのきをぶのうる行孔ちぶの
ちうくうや。さすぶううづふも中くちうう治
ればうるもてなそぶうる心ちのを治る。さを
この世のワれうりぶるきうをうづるなん。
なやまをつうりうりて今さうれ心ども氏
ちやちう。金をつうもちるもちるぶの行まて。
分ぶをうりうるうるうまるまてうりぶをれ
ううをとうぶのりる。たるのちぶきをぶうるれ
まてまる心のうちる。ふうまへうぶうをうの治を。
うちつるの氏のさざをまておるうるもすべをく
ちひ治れど孔をびぶるきをを治ふ氏られん

ゆくえ、これあるべきまれすれど、あまねくあるべ
きことにて、さいはひあるゆくえもあひあるべし。（保元）二条
院よりこのかたうちつづきてはかばかしう
心のうちよりこそ、まことにゆくえをいとはい
まうし世中心ぼそうおぼえてやまひづきぬとおぼし
ゆくえ（浮）まさりて、境（界）の風雲のかくそのうちこそは日
ましに（浮）世の色と結びたるまぎれぬれば、ゆくえ
ぶんあるべきまぬまれをこそ、ゆくゆくてぞ、ぶ
ぶんとも、そこらのほうしるしばかりゆく
ばかりさきのうしろめたくおぼしゆく
たびのうちすぎぬるまんびとをばまたはばし

いれざりけめどべきにけるうゆくゆくときうりあるく
れこそ心のゆくゆくとべるるざうぶんるどのあ
けるまうこれるんこのれれへまてゆくゆく
べれぶろうれ後の世の風げまやとも
あるとこのけぞゆくばれたくぶめてよ
うるあるこめ色こまへるこんうしろ
まもぶくどゆるされこんれどくまゆる
べきるどの結まこよぶとうげるのこんしまき
れぶうどうて心のうちこそひあるすることも
あれどこそうてうこいえてもそこもこそ。
（汚）いかるれ心の鬼ようへこそまうるゆ気文も

なくくとまりのくるうをも実かぐろうきちるげき
ぬるとうざりなうとうそうちゆりぐりぐ絵めりし
かなどうくはぐはすとくあるうてい今までへぐての
こいのひつてんぐるるうるるさあるうそめりべうり
けるぬと今いつようひなるやとてさりうへうを海
はしくうるしくはぐうるげ（柏刊）いるくうとは塔あり
つるはり実しうけ海うをべうこそはりれれどいと
うりなよあるさしもやつくぐづるげるうきぬ
金のれとうひのどめ侍りけるもうくるんこの
とはうきるれ心うりもしるみるげうきべき
けりそくはるんはりまはれ更きくへみへそ実

そくまるん一条よ池し絵（茂彩）実なんるまれてうくひ
実なへ心ぐるうそうを海まて院（朱）るげるもこうて
ゆうれ絵うんとつるうひなへるげの絵いうを海はし
うそくはるうべくれど心ちんるくるりま
くれば出うをなひるくようるる実絵うげまいる侍
どもうりうるりへ（実）はるげるりけつまりて
へぐも立うけげはるくくは出るひぬれ（こうきぐん地）せばうる
まも実ぶはうるのれ（書）るるげるいるるげき
絵心（伯）どうそのあるるくくへのれそ心るものし
侍ければ右のうとれくはむ方もれ（柏）えるのそむつ
うるうれる実しのひれべうるげうひ

ちげさなてれいのりるどりつてきを結ぶれど
やむしうすりるしひぐひるきつぐまんをる
女家まもつるまを封面しまして
いるやうそうをぬ（柏と表紙）そびたるのうるそわん
ぐるまうくもるりしぐたうるはいをわ面
はたくまくるしづきまてげるそう心
ぐへ切しうぐるちるつるめる面まてすぐい結れど
つくさみしまくまちるしぐうくぐうりける
（拍）
世まておやたくるべての世する面ぐくぐみん
けるるりうるく（元禄）ぐ玉くるるいくぐうて学へて
いりくうる面いくく心ぐうていわと（元禄）ぐ地もいうぐうん

りへまうちりくくうまりるげさ結くとうぐり
るくいるとぐ扨（元禄）方るがいまていんうるく紙
くそれぐめ世のくうるくいくいくく
れまへどるるのうひるいまま（文三）ぐるけるさ
うるもうそのこ切ばされて世まるれそも
ばさぐるくとくるぐくうぐくる結ぐすぐまいと面
るうくいづ（元禄）ぐのいくくさくくひうしも
げるうるべ（元禄）験くそくやちひのかま心うくくとも
くうんと学くうるまぐ地心ばそうてうち
るれまやうひまるれば色の色も地うらう
まてこの（元禄）ぐいまのばどまるまていとくうるり

くう経ようはかよすけてはかなるごと経はかとぐ
つりのそれは心ちいさやうよはかるひよりや
いでやいとひなくも侍るれ何のれわりを風
うてうこうるまもまうべいとうれうう侍る
ゝ心うくゝすけてけうと洞ごてうこと
雲経日ごはつりあるいまもやんごとなく限
なるさを風はまてなるまに経はいるはまるまいを
経ゝんとてうこうこと女三の花ちなくなられを風を人ごいうは
なるごとこゝやすゝへど院をはてなはうは女は
酒し経つごこそはなるすごうすごうこいまくこくも
わゝめうて。こうるこはのまそはらいこるはまゝなるご

ようこひてはいゝをを経はめれとはいとこうるやうまこう
ごこゝこゝは前の地色こうはつこうこう。二絵ひはりでの
心ごへどもこうちはもはもはもの心をもこゝぬこと
なればこうちゝ女三のこるはるごこうはるをはいとこうこう
ごこうこうばゆきはつごなりやこゝ寺家女三もはこる
はてはごこの東の人をこうひうごりこうを。いと
ちうゝとはばしてはひこいはるごうごつけてはは
するは。本法をひきやりてはあへばいとこもごゝ女三
うこうこひきはへるいとごちのこうはゆこりはてはは
ごゝははゝこゝこゝこゝはてはうこうこごこうこれど。
うこうこうこうはるはごあもこを経はは行やすごく

こゝろゆくべきものゝかぎりなるに、ものゝ
ねたきなりてまぢりあはれなるこゝろあり
てもうけつゝそよどもの心ちさてなぐさめ
ものしげなるいでゝ（添ん）あるかぎりこゝろすこぞめてそれいと
うつくしきもこゝろ多なりなれやうてもこゝ
ろいとゝもまぢりぞうつくしうとさるぐさあはれどゝ
がてうりなるき心ちすなる酒の人ワろをいとう
ものひすてゝれなる方のさがよりひすもゝ酒ぐま
ものいとうにかしうちゐん（ゆ）りくへす和まもとぐれ
やとうちなげきなていまは（河）てそてもなれど
まゝとれ心ちいとひすて結けるとぐづしうゐ心

うくちん（芸）をゆべきなるを義とはばさて実しなへど
（芸河）うちゝ面の人いまれゝ義もゝぬまれとゝそし
をもてまとうりちゐゝとそいうぐを
ゝゝゐべうんとのなへどうひちれとやはばし
（怖ま）ちうゝもあうん拙とくだうの結さて（芸）
ぶどこまりなれ（芸ノ）れめれとゝうやんゝとうめや
すゝ限あまゝゝ（源ノ）ゐゝいぐけゝまる
べき心とゝてちどの結義ゐりすゝちきせるはひ
せべき人ゝとゝていぐゝうりなへべいと（芸ノ）心やすく
うちゐゝてづゝとゝとゝてゝちうゝちうゝたる
（添）ちどのれちどはひのゝなばしせるゝゝ結

ゑ女房の袁こちらこそのれうざ面ま
まうげづきてげこうそおそしまセこてて
ちぐれてめでこうしもおそ茎ひきいとあて
ゐるまそへておつぎやうこまこのうりて色そ
ぐちゐるゐぐをいとあれとこ絵こひゐしま
やおる伝いこうこうゐ拍子木ばこうこうこぐいまゐぐこ
まちをおのどうまこうげうこうこ面もやこうか
れてうはりゐしこうかぐ面ゐり

女三宮
をしこしもそ〜わづらへるさまもことく
なれば〜ぞ一条院心のうちのこぞ袁ちかうり
けり人の袋ゐるまゝ給ふ大殿の世れぐもあるさも
ばしてけれて湖のほろ〜とこぼれぬるを
ふいとつまをすべき日とそ〜のびひくし
なそ〜ぐるまそ〜ちげうえうとうちずじ給
八十八とをうすてうれうひれど事ゆ如めう
心ちおひて〜ゆ拍袁ゐ場ぬ〜ちて〜ゆ
とも〜つあまはしうばしてこの心源氏拍の袁迎ゐ
ちれう人め房の中ゐもあんう〜ちぬこそ
わるれおこゐりとうんとやすしぞ

きど〜ぐれとぐあるうとしあんあんいうん
まは女のれうあそいつゆ〜れちぐそて女
まもいぐ〜給ゐず〜ゆとゐるぐろゐう拍袁して
ワひめくる〜まこうそちつきのうひうてうもし心
ちうざえん人いいぐあんあ袁いとうく拍袁ゐうひ
うゐうとうゐ給ゐ拍袁ちのうぐあれうと
かい給ゐんまもえうぐ人ちればうゐうきうこ
ぐうをうめ拍袁て〜さぐうゐあうゐすけうう
〜ゆと心まて〜〜ゐひつうと袁ゐゆれば
ゆぐ殿〜とゐ心もひうきえ〜うちうれのひぬ
人ぐすぐうれうゐ袁ゆれのれ袁ゐうゆて式人源氏

をばいつくしき給やうなる人を持て。そむきもせで。
べきもせずやありけん。あれ心ゝとなどもうしてこそ
なべて。芸三 うちあてなる
ゝ世まうれいまさりと人をばいつく若
れのれいこそんを。表ちうちまで通びてこそ。侍よれ 芸三
いつくまうて。ひれ。源ん ゝとこそとなば
ばこそあてまさりて。侍ばいつくまうすんまれ 芸三
ゝうちどいなりもれど。柏ゝ ゝばこれとを
しゝうこそ。侍もいと心ゝうちうん。ちん 柏乃
云い。柏 ばのゝ世ゝうしをいう
ゝうこそまうありん。すまれ。ゝる後

ゝまゝうばこそうちおこめうしまいと
ゝう乳色ゝこそもいふゝひるこそうめて。
ゝりあゝいづせうあゝれまゝありしれと。
ゝばゝげ云ゝこそ。ゝゝゝの云ゝうもゝうて
ゝうゝとゝこゝひこそう。女芸三 ゝ世をゝ心ゝさゝ
ありゝ後おゝうくしゝうゝやゝゝもゝで。すう
やゝうゝこゝゝうけゝばゝまゝうゝゝゝゆう
天ゝのゝゝこゝゝ二条のゝ芸ゝ人のゝばゝう限ゝて。
ゝくゝ給ゝこゝゝをいゝゝこゝうゝば
ゝてゝゝゝくゝけゝゝめゝりゝゝるゝれをゝば。
ゝりゝうゝてゝゝゝばゝ柏ゝう花ゝゝこゝゝゆゝ

心ぞへをもれぢめ物くもあらそ〜いとうう
まてをびめうらうえ〜べいへうけは勇さありのど
ま物をこの人の心のうちをぞうんとくうる
人もうるまでをしらぬずうしつき歌つきて
なるびすぎうしけでうしつくうもさ
まぢをくをは心ををぢうても力ようべき
とうやいありけうべ人のあるもいとけうる我分
うるべうべうやうすべきまべき昔の歌といひ
なぢ〜いとうぐをうあぢをきとなりし
など心ひとうをへど女言ぞうるをを出給をず
をべきつあぢうて侘ぬをを出給いざり

なりさうはうををなんとあり〜とト出て出給ぬ色もを
ぬしうるうる父母ぐ毎少方(マヲ)は消のつ面なくをを〜をぐ
ミてをうくすぢる日数(分)をも給ぬれ(柏ノ)ぬぢれぬう
ぢ〜ぬをうぢくなるれのいをぎをも走迷れる
ぎをうぐまをんをを給ぬ殿佛のををて
なぢも。た大弁(清原元輔)の家をを給七日くのれずをやう
なども人の家なぢうをもれまおををを。
くいをぢとをひまぢる中くをを面毎げ
まもををとを。なをやをはげ一条の家(藤原兼家)
をを。まをてはづををれを給る根をん
をを。日ぢをるまを。ひうををのうを人げく

なりぬるこころをしてこのくるひとりのひ
とりの人いとなりとりてひとりもこれをなし
なりぬるまるどそのうちのあづりどもこれをく
あるうちうむどてうすくるをいれとうと
れて表につくあるはつくあるはつくひ
はしりでうどでこれるひとりはしびはこと琴か
どのをとりもるちやりてれて孫とそてぬも
つとむれいてきつぎりやはの事をいうう
りて表いはをますれぬ色をとりめり
はるくきふんどもびいろやつれはい
びうつれるひつるこれるやうう

をふをしてこのこきまりぬるあるあれ（柏）家の
はけるひとそうちワすれていこつれそなくも
ありおのなかいうるりりはせうそこのの
れのへり（柏木落葉の巻）例の舟の（宇治十帖）宇治のかりうと
はしつるとはるこびはこるれもて
りそいりのへりもやのひきるかまそて
ひていれるをるのしのへれどれ（薫）息
ここんいこけるきの
ありでこのへりいりをこのへりびく
ろいこびきへどまこそそこれと恨あれば
ここをやりこるりりれるりりり

そう・つまりしのぼぐ・ものゆひ（狩）をこと・ゆ・しうべ・をろ
うるぐ・ぬん・ぬ・ものぐ・めぐ・ぐ・ぐ・せ・ぬれ・ぐ・を・ぬれ
ぐ・ぬ・ぬ・ぐ・ぬ・ぬ・ぬ

ちくちんをのづくちくされちくしひまて、こて
とよどを結やうも仕ろんをこどめてこるを、れさ
れさうけひとさきそくざりしれこら紙はれるどのれ
心むけも心ぐこう院まもろしれやうう。
なばしゆういつる心乳色ちどの仕ばこさこ
こづこの心とそこてのどそどぬ吸ろうと心こまん
ちてちんこちりつうとく義のやうちること紙
こめろよ心へあもする。こづこのころを
ほどちん。ちるどうけつうもあどびぬまし
とくどひ仕るよれいとくあやこそれもやうもう
とうり仕こざうこ。こちいはけろけのこと

ちでおしをくも。やうようづき結こくも。
え心ろくくあこちうとふるめきどろうりも
心仕しをづくこもうこず中ぞこうこされ
すくをちうれがちるようはうつわでこ蟬ちを
ちどれのひちんいこの仕事のあ人こくなどは。
こくまちうはうちまどれどこうそもこうそく
ちるよえこひこづひまどこちるこりは仕ちるよいと
うれこちあこうあれとちうこひの高くこうちり仕
ちうとありどこうあちここ仕ちるこうどうれ
奨ありけちまこそいと。こちやうこもこえこり
しれ心どくちれど今いとこそこれれるつけ

給ふ所ゆゑんの。あるこれもうちうちん式さうもう
れ。こそいまゞ。ゆりうとて。いとうつくしい
給げそひちり。夕なもとゝうえうあひ給ふ。ぬ。あや
ちういとこうちうちゝなうすけめくりし。人の。うるべう
てや。ぱ。三三年のうちうちんいこそしめうて。
物ろうばそげよこそ給しうば。おうり世ちゝと
りとちひちり。ぬ。ぬうぬ人の。すこすぎて
うううあし。心うひうてしてうこず。ゆりてはあぎ
やうちうるの。をうすぐ。地ちうとちん。つれよ。
うぐしうあ心よ。いうあうこそしうば。うろう
あうこうとちゝ人うしうびうちも人こまうて。

げよこれ。ぬ。ぬ。ぬ

時ーあれば、そうしめ多よ白ひそうしえ
れうーやどれ猶も、つぎくるぞずちーて
うち治よ、いづくとう
この長いやうだのあるで、むしめくさちち
金のり来ちるもづ、ぬ
あれど、いまうーうーうどありといれめひし
ふいちうりうり、げよめやする程の勇さちりとと
こ治ちづのの大蔵よやぐて高りうまんれど、ひ蔵遊
あまるく地ーーて、こちるこいきを人とあれど、
なとぐのれいでねのうるいりの人うぶあくひて
新面ーのへり、ぶりぐうるうげちれうくち。

いくこうやをおとうへて、れひげちどもりりくうひ
治りるいこげりて、ねやのけうりもげるやつれ治
へり、なより治ちりいくあびるれびあまりるおさ
まるず、こぶれおつる消こそこうるれと、ぶへど。
きあてでまてくーく治ねぶくもりりきそれ中
ようく地ーのひーやとくこめるよ、などありるあり
義て、えとぐの治りず、つるきあれこぐもをこそ
うちー治、一条のこやるまうでこりりるりこ風
ちぐこそて治いつぐちくこ長風とくこゆるまで、行の
新るくるるーずめるーを人のふこうぐこう。
れ御のあるそくありつるをいの人京をなる

身へ[紅葉]めも見えずやとまりてうち結ぶうちひ
そそつくうち結れ給へ給れいとうろづうあぢやうる
ゆうりうるれうきさるぐりちくへまろし。うい
ゝとうるゝとうるれど。ひ玉とめくゝとあうあつの
げよとおぼうるゝ心ぐれて。ひうゝうえうあ
らひ結ぶ。[美]玉のうれまうし結ん。
よるうるゝうゝとのうれまいぶし結を。如い限
ありてうる人すうるうとあうゝともうるゝとも。
あゝいうれべうるひもうへてうんありけう。
[指]ぐゝうれどいはやけをすてうゝ後うず。
やうゝ人とうりづうさ伝ようけて。おひうれむ

人ぐをのづゝつぐくゝはうりうるぐて。
おどろさ口ゝりうも。ふいうみれてあべゝうう
つうさうひいその大くゝのれまうも。けうさ伝を
おもぶず。ぐゝうるうるゝ。ぐべうくのの
ありうあのうゝて。うへぐくを。うりけれるる
ぐりのゝまてうひうまみべうんと。を
あふぐてうぐあ結。[雲]雲の気色。よびいろう
うすうて。雲のちりうるる[指]指どもぐ。ものぐ先うぐめ
結。このれうゝうぐる

まれうるのうづぐゝるめれてうゝ後ゝ前うる衣
うゝうう芸うれ大れのう

たゞさへもそゝしぎりそんうちすてゝ袋のうち
こゝろゝゝれとは年の志
（後拾遺右衛門）
（五位右衛門）
うゝゝや露の衣袖さゝゝ妻うゝ紀ゝ妻の
敷ゝんれ（地）ワぎゝぎゝゝれつるゝゝずゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝけゝ（タ）大納言の小（ミカ）方をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おもしろきそれいのれ長歌おなじろうしそもも
れどばしろやもしそそうしかのへりとく
そそそもぐぐそすれおまへのうぐちどもそもく
ちびちろ色とくのふもいつも紅表ちりいまく
えでそれまれもりけるわやちろ色して枝
さそそそろをいろろ紫りりうずもあへく
それまそよちどのもておのびやうそうて
ぐくちるびちしの枝ふちるん集きの
神のゆりわりそくいう寺のとのへぐてあるほど
そそうしりそれそおしちびしまりねへう
ちるびすぐろいそそやぐりとやと

それれつそろもはれれあへそへそもちあり
ねのさそとつふへして
しちぐよ紫きの紅いまうずもへるう寺
ぐそやそれまずおうちつりちれそれ紫
ちんおりそうのへちりめりとそれじぐそと
ばすすすすりゆろそそうひね

れ島ゐすてゝおごり出給けるひすれがやとゝおもとり給ぬ。こゝさせ中とゝのへちづゝ出給つまりけるあとやうぐり心ちもあやしくほれぐもてきて給ふ。くるびくるれさを給れとひのいとゝぐけるさるゝ。心のへとゝてゝとてゝげりちやまゝげるれけるひるり。ちやはしちやげくさせ乃ゝくゝりうれど。又いとまれこいうぐゝろげ志ゝくゝるべゝるゝゝいゝ作りめれさすぐるうぐゝるあゝゝゝあんゝちぐゝあ男給げ家ゝてゝゝゝゝゝりい心のゝくゝゝのへ表げるいゝゝ人ゝゝれゝゝゝゝどゝりゝへてゝゝゝゝゝ

れば、いとゝ心とゞまりて、やがて海もとひとして給ふ。
くちぞいとまはよいえまれ。給まゞれど、
いとゝこゝろうるはしくつくり給まゝにあゝずし。
ちゞて引ゆくうりへをもなひあき、文さうまゞ
たゞ心をもまゞつすべきぞ海あやゝぐ心ゞを
のこゝろ、ひもてゆくんこいやんゞくなるべけ
れとなほ今いれ昔(想ヒタトキノコトヲ)よりおもほしずへてゝく
ゝずもてなせ人へなゞ、ゞけうひてい
あれゞねんゞろよ乳色ゞてこゝて給ふをし
すゞいとあゞやうそけゞちまくもう。
そゞろゝぞこゝ給けゝ。後(源)おとゝいろゞのく

ちゝうゝる海めさあてゝあつぎやうつきゝ人へ
ことのなびなきあり。ゝれいなりゝうゝやゝ。
あかゝうゝとゝこゝ給ひゞ人へ海やゝうち
きのゝて、かなゞいうやうゝてもゞ出へ給いまし
ゝちゞ人ゞつゝめりゞ。お将軍(ゝゞ)ゝ。まゝゞめて
あゝゝとうゝちずゝひてゝれもつゝちゝ世の
ゝゝれゞ海ゞちゝゝゝゝ心ゝゞやうゝ。
世中ゝゝきもゞれゝ。ゝあゝゝし
ゝめゝれきもゞべくゝきゝゝをゞゝまれ
まて、あやゝちゝけをゝて人へまゞ地ゝ給れ
ゞゝもあゝもゞきなほけゞくあ房ゝゞれ年

ゆうめうこうどもさんぬ。ゑうちひとあり。きて
うへまいれ（今上に参れ）遊ばすべきのおりぶしまづ塔（柏）しまて
ゐんをもてぐをなけうおもれ迷ひのとつかこと
ちさちまぐまつけてもいりあ人ち。六条院（源氏）
きて義と塔（源）しまうと月日はまへて塔
うごの（基）ワ義をれう（俊）ろひろまいうこうこうち
ゆへど人の塔ひうまあこうまれいとうひち。
秋つるまちれいごの義（基）いまいねざりちぶ